

平成29年10月8日(日)

老球の細道362号

一流アスリートは親の本気度から

会津バスケットボール協会 室井 富仁

トップアスリートの多くは、支える両親の本気度がすごい。朝日新聞で連載されている『未来ノート 202Xの君へ』記事のテニス・錦織圭の親の本気度の凄さが記されていた。親の本気度がアスリートの成長に大きな影響を与える。

【父清志さんの目標も高かった。世界ランキング1位になったアンドレ・アガシ(米)は3歳でラケットを握ったと聞き「圭はまだ5歳だから、始める時期はそれほど遅れをとっていない。世界一になれるかも」と思った】

コーチの目標の高さも重要であるが、親の目標の高さも同じである。親が世界を視野に入れてれば当然子どもも世界を視野に入れ、世界スタンダードで物事を考える。

【テニスの専門誌はすべて買い揃え、熟読した。テニス界のどんなささいなことも見逃さない決意があった。錦織が愛用するラケットメーカー、ウイルソンの日本支社に知人を通じて売り込み、11歳という異例の若さで用具提供契約を結んだ。選んだ理由は、将来海外転戦するときに、トッププロが使っているメーカーなら手厚いサポートが期待できるからと、先を見すえて研究し、行動に移したという】

親も同じ土壌で理論武装し、子どもの1歩先を進みながら、将来の環境整備を図る。親自身が広い目、高い目、大きな目、深い目、そして長い目という偉大な子どもを育てるための「五目眺め」で物事を見ることが必要になる。コーチも同じだが。

【息子にテニスの大事な点も話して聞かせた。「実生活で人を欺くことは悪いことだけど、テニスのルールの中で、相手の心理の逆を突き、だますことが勝負なんだよ。勝ちきることが尊い」と説いた。燃え尽き症候群にならないために、遊び心が大切なことも話した。「人生の中ではテニスより大切なことはたくさんある。たかがテニス、されどテニスという心のゆとり。それが上達、長続きの秘訣だ。遊びが原点にあることを忘れてほしくなかった。遊びは楽しい。楽しいから飽きない。本気で取り組む。本気だから強くなる。強くなるから、もっと楽しくなる。そんな好循環が理想だと思う】

このような親の哲学で育てられた錦織も言う。

【「僕はテニスの仕事という思いがない。趣味の延長線上で生きられているのが、本当に幸せだ】

若き天才の危ういところは燃え尽き症候群である。ゆとりを持って楽しませ、人生の優先順位(ジョン・ウッデンは①神②家族③学業④バスケットボール)をはっきりさせ、バスケ漬けにならないよう、親自身もゆとりを持つべきだろう。

私も自分の子どもに夢を託してバスケットボールに取り組ませたが、自分の子どもよりよそ様の子どもにかかる時間が多くて十分な関わり方ができなかった。WJBLトヨタの大神選手の父親(元山形大学H・C)が娘の中学時代にシュートのリバウンドを取ってあげて英才訓練していたという話を耳にして、私も次男が高校に入学した時に真似をしたことがあったが、次男はまもなく膝の靭帯と半月板を損傷して、夢は幻と化した。

今は孫たちに夢をもう一度。「爺様の本気度」が孫にどのような影響を与えていくか楽しみである。私の人生最後の「プロジェクトX」になるかもしれない。